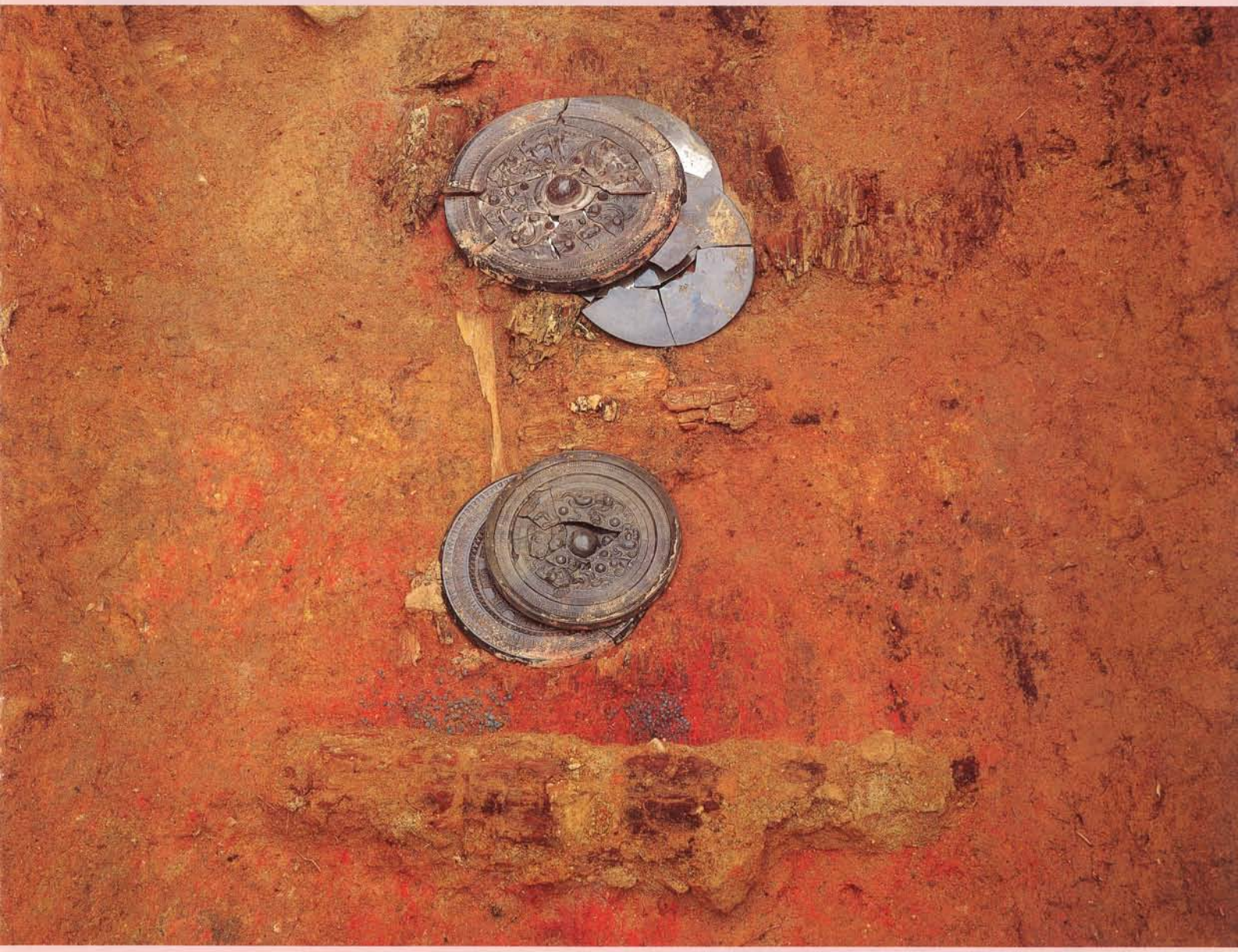
安満宮山古墳



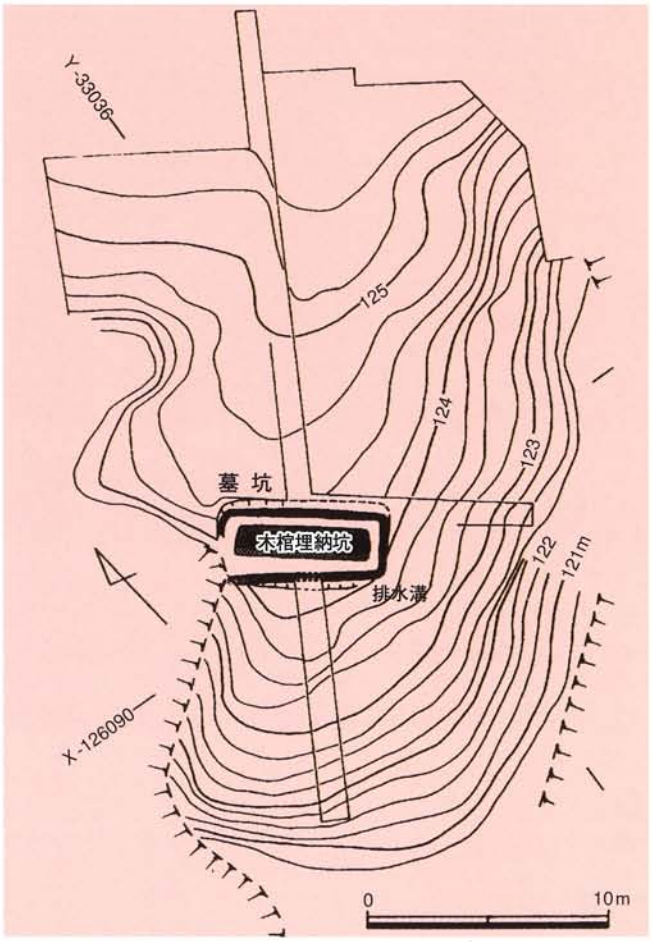
1998

高槻市教育委員会

はじめに

安満宮山古墳は高槻市安満御所の町であらたにみつかったもので、古生層を基盤とする山塊の南斜面の中腹に位置しています。標高は約125mで、眼下には史跡安満遺跡がひろがり、そのすぐ南側に山城盆地から大阪湾へといたる淀川を一望することができます。墓坑内の木棺からは魏の年号である「青龍三年（西暦235年）」銘をもつ方格規矩四神鏡をはじめとする５面の青銅鏡ならびにガラス小玉・鉄刀・農工具など、貴重な遺物が出土しました。

安満宮山古墳と史跡安満遺跡



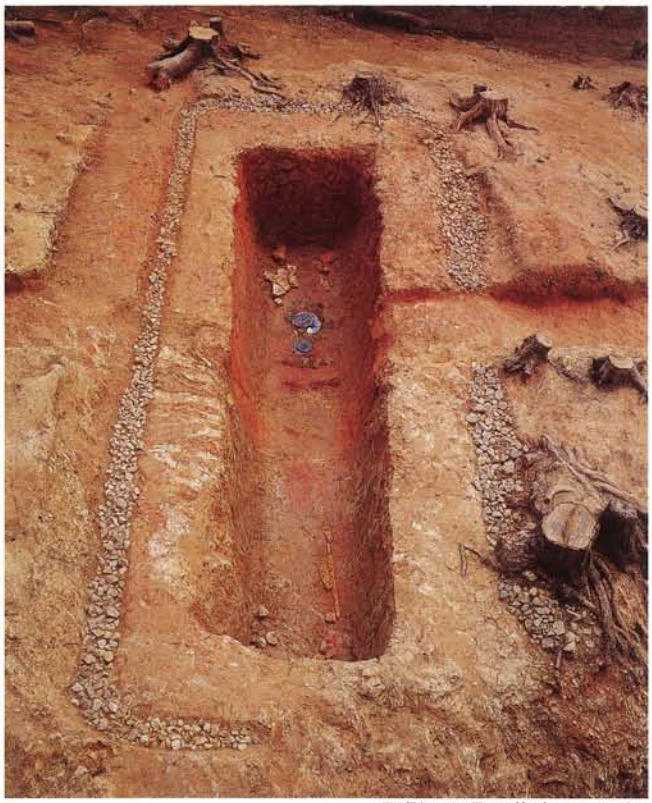
安満宮山古墳測量図

古墳の概要

古墳は南北約21m、東西約18mの不整な方形墳で、盛土の一部を墓坑の北側で確認しています。埴輪列・葺石などの外表施設は認められませんでした。墓坑は尾根筋に直交するかたちで設けられ、主軸方位はN－44°－Wです。墓坑の規模は東西約7.5m、南北約3.5m、現存する深さ0.3～0.4mで、掘方の下端周縁には拳大より一回り小さな割石や河原石を充填した幅0.15～0.3m、深さ0.1mの排水溝をめぐらせていました。墓坑の中央には上縁長5.5m、同幅1.3m、深さ1.2mの木棺埋納坑があけられ、坑底に接して割竹形木棺が埋置されていました。また坑底床面の傾斜はほとんどなく、ほぼ一面に朱が散布されていました。木棺のほとんどは腐朽消失しているものの、棺材の遺存状態から、直径約0.8m、長さ約5mに復元できます。なお東西両端部では棺を支えるために偏平な割石を数個ずつ差し込んでいました。

副葬品

舶載鏡５面(１～５号鏡)のほか、ガラス小玉1000点以上、鉄刀１振、板状鉄斧１点、有袋鉄斧１点、鎌１点、ヤリガンナ３点ほかがあります。舶載鏡５面は、いずれも東半部からみつかり、２つのグループにわけて置かれていました。第一のグループ（１～３号鏡）は墓坑東端から約1.2m離れたところの木棺中央部で、３面が上から１・２・３号鏡の順に重なった状態で出土しました。そのうち１号は鏡背面を上に向けて目の細かな布でくるまれていました。第二のグループは第一のグループと約0.2m隔てたところで出土し、上に４号、下に５号を直接重ね、２面とも鏡背面を上に向けていました。ガラス小玉は４・５号鏡のすぐ西側で２ヶ所にわかれてまとまって出土しました。鉄製品は墓坑の西端から約１mのところの棺西部の南辺でひとまとめにして置かれていました。なお、これら副葬品の配置状況からすると、被葬者の頭位は東と考えられます。



西側から見た墓坑のようす

副葬品出土状況（東群）

副葬品出土状況（西群）
ひとまとめにされた鉄製品は鉄刀を上部に全体を束ねたようにして置いていました。鉄刀の全長は68cmです。

(1/1)

「青龍三年」方格規矩四神鏡（2号鏡）

後漢前半の方格規矩鏡をモデルにつくられたもので、偏平な半球状の鈕のまわりを方格で区画し、内部に直線的な文字で十二支を配しています。内区には線描の「玄武」「青龍」「朱雀」「白虎」の４神と瑞獣を置き、四方の要所にTVL字形の規矩文を配しています。L字は正L字形です。外区は鋸歯文＋珠点付複波文＋鋸歯文で構成されています。銘文は時計回りに七言句で、「青龍三年　顔氏作鏡成文章　左龍右虎辟不詳　朱爵玄武順陰陽　八子九孫治中央　壽如金石宜侯王」と記しています。方格規矩鏡の型式変化の流れからすると、本鏡は復古的な意匠を示すものといえます。直径は17.4cmです。同型鏡に京都府大田南５号墳の「青龍三年」鏡があります。

鏡銘「青龍三年　顔氏作竟・・」（部分）

（1/1）

（写真提供：弥栄町教育委員会・峰山町教育委員会）

（部分）

大田南5号墳出土の「青龍三年」鏡

「青龍三年」鏡の第一号は、1994年1月に京都府竹野郡弥栄町と中郡峰山町に所在する大田南５号墳から出土しました。大田南５号墳は丹後半島の中央部を北流する竹野川を見下ろす丘陵上にある大田南古墳群のなかの１基で、長辺18.8m、短辺12.3mの小規模な方墳です。凝灰岩製の組合式石棺には、「青龍三年」鏡とともに一振の鉄刀が納められ、墓坑上面には埋め戻した直後に破砕したとみられる土師器が出土しています。築造時期は４世紀中頃と考えられています。

三角縁「吾作」四神四獣鏡（1号鏡）

後漢末の画文帯環状乳神獣鏡の系譜をひくもので、鈕座に小突起をもち、内区の中央寄りに４つの乳があります。図像はやや不鮮明ですが、獣の背に座っている「東王父」等の四神が描かれています。銘帯には七言句を基本とする46字の銘文が記され、字配りはやや不揃いです。また「東王父」を「東王」、「西王母」を「王西母」としていたところがあります。直径は21.8cmです。

（1/2）

三角縁「天・王・日・月・吉」獣文帯四神四獣鏡（3号鏡）

画文帯対置式神獣鏡の系譜をひく三角縁神獣鏡の前半期の作品。

内区内側に２体ずつの神像と獣像を交互に配置した複像式のもので、神像の間には傘松文様を配しています。各乳の下半には７つの鋸歯文をまいた珍しいものです。獣文帯は方格と小乳で10区に分けられ、方格には「天・王・日・月・吉」銘が時計回りに一字ずつ鋳出されています。外区には鋸歯文と珠点付の波文を配するとともに、外周突線が認められます。直径は22.5cmです。同型鏡としては兵庫県安田古墳出土鏡などがあります。

（1/2）

(1/2)

斜縁「吾作」二神二獣鏡（4号鏡）

画像鏡や神獣鏡の図像文との親縁性や断面三角形を呈する周縁をもつことから、三角縁神獣鏡と兄弟の関係にある鏡です。内区に二神二獣を置き、「東王父」と「西王母」には侍仙がともなっています。図像は精緻で状態もすこぶる良いものです。外区には鋸歯文と棒状珠点のついた複波文が配され、外周突線も認められます。銘帯は「吾作明鏡自有己」からはじまる34字が時計回りに記されています。直径は15.8cmで、保存状態は極めて良好です。

(1/2)

「陳是作」半円方形帯同向式神獣鏡（5号鏡）

後漢の画文帯同向式神獣鏡の系譜をひくもので、内区には「伯牙」「東王父」「西王母」「黄帝」の神像といくつかの獣形を配しています。銘文は反時計回りに「陳是作鏡　君宜高官[官のみ逆字] 保子宜孫萬年」と記し、外区は鋸歯文と複波文で構成されています。直径は17.6cmです。同様の内区文様をもつ鏡としては「景初三年（西暦239年）」銘のある大阪府和泉黄金塚古墳出土の画文帯同向式神獣鏡や「正始元年（同240年）」銘をもつ群馬県柴崎蟹沢古墳出土の三角縁同向式神獣鏡などがあります。

鏡を包んでいた布

(1/1)

まとめ

安満宮山古墳の盛土の大半は消失していましたが、埋葬施設については、木棺埋納坑が墓坑底面からさらに深く掘られていたことが幸いし、遺物は極めて良くのこっていました。副葬された５面の鏡は「青龍三年」鏡（２号鏡）をはじめとして、すべてが舶載鏡と認められ、なおかつ３世紀前半の限られた時期に製作されたと考えられるものでした。

これまで景初三年の卑弥呼の朝貢に対して魏から与えられた、いわゆる魏志倭人伝所載の『銅鏡百枚』は、三角縁神獣鏡を中心に考えられてきましたが、今回の一括出土によって、「青龍三年」鏡や同向式神獣鏡もその下賜品とみることが可能となりました。

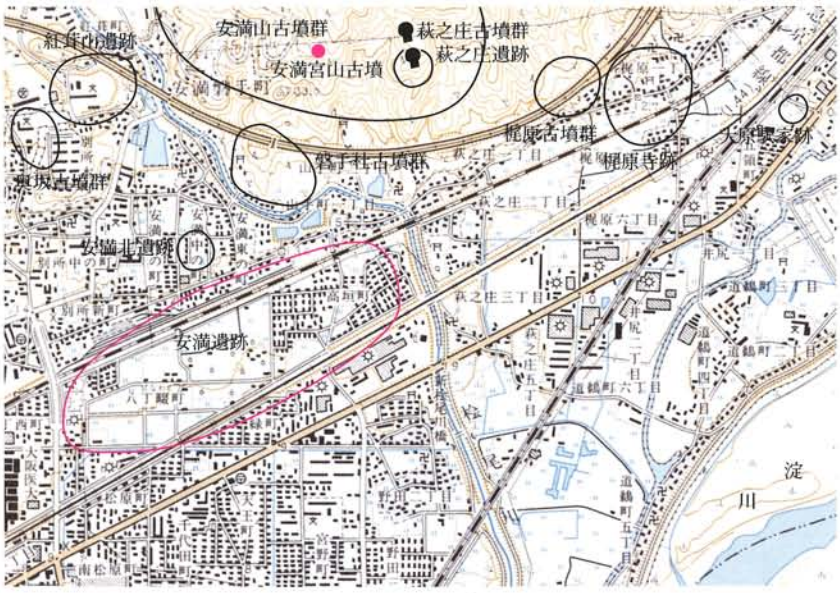
安満宮山古墳の築造年代については、世代を超えた伝世鏡を含まないことを基本に、さらには木棺を深く埋置するための墓坑の形状や鏡を積み重ねる埋納法などが、古墳祭祀の定型化以前の手法とみることもでき、３世紀の第３四半期、それも極めて早い段階と考えられます。瀬戸内に通じる淀川に面した三島の地で発見された安満宮山古墳は、今後の邪馬台国論に大きな影響を与えることでしょう。

安満宮山古墳から大阪平野をのぞむ

紀年銘	鏡式	径cm	古墳名
青龍三年・235	**方格規矩四神鏡**	**17.4**	**安満宮山　（大阪）**
青龍三年・235	方格規矩四神鏡	17.4	大田南５号　（京都）
赤烏元年・238	平縁対置式神獣鏡	12.5	鳥居原狐塚　（山梨）
景初三年・239	画文帯同向式神獣鏡	23.8	和泉黄金塚　（大阪）
景初三年・239	三角縁同向式神獣鏡	23.0	神原神社　（島根）
景初四年・240	斜縁（三角縁）盤龍鏡	16.8	広峯15号　（京都）
景初四年・240	斜縁（三角縁）盤龍鏡	16.8	出土古墳不詳
正始元年・240	三角縁同向式神獣鏡	22.6	柴崎蟹沢　（群馬）
正始元年・240	三角縁同向式神獣鏡	22.7	森尾　（兵庫）
正始元年・240	三角縁同向式神獣鏡	22.6	御家老屋敷　（山口）
赤烏七年・244	平縁対置式神獣鏡	16.8	安倉高塚　（兵庫）
元康□年・291～	平縁対置式神獣鏡	13.0	伝・上狛　（京都）

日本出土の中国の紀年銘鏡一覧

安満宮山古墳とその周辺　（高槻・淀）



編　集／高槻市立埋蔵文化財調査センター
高槻市南平台5丁目21-1
Tel.0726-94-7562

発　行／1998年3月30日改訂

印　刷／株式会社 日東印刷
Tel.0726-77-3711